

学園対魔捜査官

# 斎藤綾乃2

小説 岩重十郎太

挿絵 友屋勘九郎

立ち読み版

|       |     |     |
|-------|-----|-----|
| 第一章   | 継戦  | 007 |
| 第二章   | 逃走  | 037 |
| 第三章   | 退潮  | 091 |
| 第四章   | 衝突  | 136 |
| 第五章   | 結末  | 210 |
| エピローグ | 後日譚 | 239 |

## 登場人物紹介

Characters



さいとう あや の  
**齋藤 綾乃**

対異形治安委員会・潜入捜査室学生班所属。委員会からの命令で私立橙花学園に潜入している。

くすのき ゆう か  
**楠木 夕華**

対異形治安委員会の実力者。綾乃を督戦するように治安委員会から派遣され、学園に保健医として着任してきた美女。

く どう しゅんいち  
**工藤 俊一**

映像研究同好会副会長。細身、ひ弱な感じのオタク生徒。

たかさか げんいち  
**高坂 玄一**

学園に出入りしている購買の納品業者。綾乃の過去を知る謎の男。

声と同時に、夕華の中指が深々と綾乃の肉孔に突き刺さって、少女の肢体が硬直する。突然の強い刺激に眼前火花が散って、精神どころか肉体さえ反応が遅れる。グジュリ、淫音が淫汁が夕華の手甲まで伝っていき、ゆっくりと強烈な性感が理解され始める。

「……………」

淫汁を溢れさせながら、それでも狭く引き締まった肉孔に異物感を漸く悟る。細く長い指の形。肉襞を押し退ける圧迫感。微かなバイブレーション。認識と同時に、圧倒的な性感が下半身を支配して、上半身を押し、情けなく気の抜けた吐息が喉から口をついて出た。

「……………あ、ひゃ、う……………」

(なんて、声)

恥辱を覚えながら、それよりも菌裏に当たった舌の、刺す様な刺激に目の前が歪む。

「声まで変態そのものよ？」

(いまのは、違う……………っ)

嘲りを浴びせられて、否定と裏腹に脊髄がゾクリ震えるのだ。指がヌツと抜け出ていき始めて、肉襞を擦られる感覚と喪失感覚とに腰からふっと力が抜ける。その完全に無防備となった肉孔をもう一度夕華の中指が貫いた。

「っ！ ん……………！」

クチャリ、淫音。辛うじて舌を口奥に沈めたまま嬌声を耐える。だが、抜かれて、貫か

れて、抜かれると、脳が快樂電撃に染められてしまつて、意識さえ剥離していく。ゾクゾクと背骨沿いに痺れが走つて、朦朧と仕掛けているのに、

「幾らなんでも濡れ過ぎじゃない？」

揶揄だけは、淫音とともに明瞭に聞こえてくる。それは耳から脳を直接撃つ刺激そのもので、辱められるたび首から上がブルブルと震える奇妙な愉悅に浸らされる。それは三日間に幾度となく味わたつた侮蔑による快樂と、まったく同じ。綾乃の性癖はとっくに見破られていた。

「クス、声でも感じちやうのね？」

衣擦れの音とともに、唐突に綾乃の眼前、夕華が立ち上がる。そして圧しかかる様に身体を重ね合わせてきながら、少女を鉄柵へと追い詰めて、鼻先同士、突きあいそうな距離で妖しく笑む。放り出された右足が意志なく自由落下して、足裏が床を打つ。顎先が夕華の左手に摘まれて、変形した口腔で擦れた舌の性感に気を取られた隙に横を向かされる。咄嗟、左目で保健医の顔を追うと、長い横髪を掻き分けて紅唇が少女の耳介に触れそうに迫つた。

「これが、好きなんですよ？」

至近距離で囁かれる。ゾツとする鋭利な性感が耳孔から脳をついて、呼吸が詰まつた。

「ほら、キュ、つて締まつた」

「身体、ピクンピクン震えてる」

「本当に、これでも変態じゃない積もり？」

左の腕が背中に巻きついてきて、少女の明け透けな反応が余すところなく拾われる。グラグラと、視界が揺れた。嘔きが聞こえる。淫猥な実況と傲慢な定義が脳へ直接送り込まれて、呆然とさせられるくらい心地よい。もう舌を沈めておくのも嬌声を耐えるのも、すべては作業に墮して、全身、あらゆる感覚が、声と一本の指とに集中していく。

「イッチャえば？」

いざないに頷こうとする頭を辛うじて抑える。嘔きが教えてくれた残り時間は、あと二十五秒。時間は驚くほどゆっくりなのに、早くも単純な抜き差しや嘔きだけの刺激に焦燥した肉体が、ヒップをくねらせ始めた。少しでも角度に変化をつけ、肉襷を擦りつけ、たった一本の中指がもたらす快楽を、少しでも大きなものにしようと足掻き始める。

(……この、感じ……)

しかし増大する性感には、奇妙な安息を覚えるのだ。すっかり刷り込まれた肉体と、頻りに蘇る記憶とが交わり合い、この愉悅の溢れる状況こそが自然であると錯覚しかける。映像を見せられたときから燻っていた肉体は、もうすべてを思い出して、愉悅に爛れた三日間の記憶が後押しする。快楽への傾斜が増大して、大胆に揺らめくヒップが、グチュグチュと淫音を高めてしまう。



「気持ちいいくせに」

「無理して我慢したって、ダメ」

再び嘯きにいざなわれて、苛立たい葛藤が加速する。呼吸が愈々忙しくなって、鼻腔を伝う吐息の熱が増す。せりあがってくる快楽に、精神は追い詰められて、無駄だと知りながら、綾乃は右の手首を拘束するAMSへ、衝動的に言葉を浴びせた。

(……動け……！)

本当はまだ二十秒以上待たなければ解除はできない。だが快楽と記憶とに翻弄されて、もう猶予はなかった。なにかを仕掛けていないと、均衡を保てそうにないのだ。脊髄を伝ってのぼってくる愉悅に身体を震わせ、耳孔に注ぎ込まれる嘯きに頭を揺さぶられながら、綾乃は意識の集中を取り戻そうと試みる。眉間に力を入れ、唇を無理にでも閉じ合わせて、精神の静謐を模索する。連続する快感痙攣と熱息と双眸の窪みに滴る汗の雫とに攪乱されながら、少女は精神の一角に確かなイメージを作り出した。

(……解除)

カチリ、AMSの外れる音。

(……え?)

それは、拍子抜けするくらい呆気なく勝ち取ることのできた小音だった。右の手首を拘束していたAMSが解除され、圧迫感が消え失せる。反射的に軽く振ると、動作のままに



手が揺れて夕華が可笑しそうに囁いた。

「あら、時間誤魔化してたの、バレちゃった？」

(！)

聞いて、理解する。夕華は実際の時間の経過よりも遥かに遅く、残り時間を告げていたのだ。そうと気付いて、少女の心に憤りよりも、自身に対する呆れの念が湧いてくる。時間の流れを正確に捉えられないくらい冷静さを失っていたのだ。だがいまは嘆いているときではない。

(左手も……ッ！)

急ぎ、左手の解放を企図して、気を再集中する。しかし、夕華がゲームをそう簡単に終らせてくれる訳がなかった。

「クス、指、増やしちやおうかしら？」

言い終わらないうちから人差し指が肉唇を引っ掻き始めて、それから滑り込む感じで肉孔の入り口に侵入する。浅と深、両方を同時に弄られる性感が、肉体に三日間を懐古させて、グニヤリと下肢が沈む感覚。保健医の二本指が左右に大きく開いて、肉孔が大胆にくつろげられる。と、糸を引く様な粘音がして、粘膜を撫でる外気が意外なくらいこそばゆかった。

(……ダメ、集中しないと……っ)

呻き声は、しかし、虚しく体内に散っていく。三日間のうちに散々教え込まされ、すっかり馴染んでしまった刺激の数々を再演されて、溢れてしまう愉悦が、精神の集中を阻害していた。全身、神経という神経が、快樂信号をネットワークすることに手馴れてしまっているのだ。

「ほら、耳も噛んであげる」

(ひあ、う！)

瞬く様な峻烈な刺激に、また、嬌声が弾けかける。

「指だって、二本だと全然違うでしょ？」

二本が増えたばかりか、バラバラに動かれると、少女の予測能力は限界を越えてしまつて、予測不能の性感が強烈過ぎた。不意に肉襲をそつとこねられるだけで。柔肉を軽く摘ままれるだけで。刺激が綾乃の肢体を駆け巡り、脳を撃つて、痺れて、能動が阻まれるのだ。或いは嘸きばかりか、揺れるヒップのせいで振れた膣内が発する淫猥な水音にさえ、少女の脳は打撃を受けて精神の集中は乱されてしまう。

(マズい、マズい……っ！)

僅かな視界で下肢を見れば、派手に楕円を描き続けるヒップ、快樂を与えられるたび素直に爪先を仰げ反らせる足が、まるで他者のものの様だ。いや、莫大な快樂を脳に送り込んで解除を妨害する下肢は、他者どころか敵対者そのものに違いなかった。

「ほら、解除しないの？」

(言われなくとも)

即座に思う。なのに、集中はできないまま。二本の指が、肉孔を激しく掻き混ぜる。更にヒップを撫で回される刺激が加わって、少女の肉体が新たな快楽を受け入れる。解放した右手でベッドの柵を握り締め、せめて右上半身だけでも強張らせようとするのに、力が入らなくて、柵に縋った様な姿勢しか取ることができない。

もう、全身がそんな有り様なのだ。ただ精神だけが頑強に抵抗しているが、肉体はすべて、快楽に順応している。

(このままでは、本当に)

予備役に移されてしまう。それどころかこのノーマンクラッターの慰み者に墮してしまいそうで、追い詰められた少女はふと右の手甲を見る。そこには過去、幾度も対魔捜査官としての力を湧き上がらせる切っ掛けとなった昔日の紋様が隠されている。

(そうだ、思い出せ)

不意に、念じる。精神を過去に集約させるのだ。昔日の異形と、半生と、海野の如き第一五列。それらに決して敗北してはならないという義憤。茹だる熱気と喧騒の中、精神の一角に再び確かなイメージを描き出す。そして綾乃がAMSに解除を命じようとしたとき、保健室に唐突な呼び出し音が鳴り響いた。

「んなカッコでなに言ったって説得力ないっての」

言われてゾクゾク、痺れる様な愉悦。その通りだった。自らの武器で右手と双乳を縛り上げ、勃起乳首を見せつけながら、自分で開いた股間からは濡れた恥部を晒して隠そうともしない。溢れ出た淫液に内腿やヒップはすっかり汚されて一層光沢を強め、場所によっては不潔に乾いて灰白くこびりついている。それに幾ら誤魔化そうとも、荒い呼吸だけではどうしようもなかった。細鞭にくびり出された双乳が上下動を忙しく繰り返しては、少女の呼吸頻度を審らかにしている。

女子生徒たちの声が、視線を誘う。一度は気圧された坊主頭さえ卑猥な視線を綾乃の下半身に送り始めて、凝視する視線の強さに眩みかけた。

(まさか、分かっていて)

肉体は、生徒たちの反応を予期した上で煽っているのではないのか。暗い考えが頭を掠めて、それを肯定する様に、言葉を放った。

「さあ、私にはやらなければならぬことがあるの。さっさと解散してくれないかしら？」  
少女の左腕が唐突に動く。それは左手を美貌の前に持つてくると、小虫を追い払うかの様にヒラリと払った。そして間髪を入れず人林を掻き分けて前に飛び出してきた女子生徒が、少なくとも三人。

「ふざけんなよコイツ！ お前こそさっさとやれって!!」

憤然と中央に勇み出た女生徒たちが、綾乃の腕を掴み、髪を掴み、背中を小突いて、坊主頭の前でクルリと百八十度反転させる。そうして後ろ向きにさせられた少女の身体が、無闇と乱暴に、目の前の机に叩きつけられた。

(……………)

打ちつけられた衝撃などよりも、無理に押し潰された双乳の生み出す性感に息が詰まる。目の前が急速に変転して、いまは正面に前列の椅子の背凭れが見える。それから立ちはだかる人林の足。頭と肩を押さええられ、見ることができるのはそれだけだった。

「ハイ、一番手!!」

喚いたのは滝沢だ。後ろから足音が近寄ってくる。視線が僅か一部分に集中するのが分かるのだ。細腰からヒップへの鮮やかな曲線の先、形のよい双丘の谷間、無様に割り開かれた漆黒の狭間に露出した紅い淫靡な秘裂と、黒々と貼りついた陰毛と、慎ましく赤黒い後孔。すべては淫蕩に照り光って、濃密な匂いを放っている。冷静な美貌の対魔捜査官が見せるには、余りにも無防備な猥雑さだった。

「よ、よし、んじゃいくぜ!？」

確かめる様にスーツ越しのヒップを一撫でしてから、坊主頭が細腰を掴む。クチリ、熱いモノが肉唇に触れて、胸が高鳴る。騒然とする期待感が身体中に溢れて、それでもなお、声だけは奇妙に冷たく口をついた。

「入れたりしたら……っ」

「入れたりしたら？」

髪を掴まれ、頭だけが上を向かされる。視界が変転し、人林の顔が重なり見える。見詰められていた。窺われていた。そして鋭く強烈に、勃起が綾乃を貫いた。

グ、チュクッ!!

「あふ、……んっ！」

押さえつけられた身体が、それでも強引にビクビクと弾む。激しい性感が肉体の奥深くをいきなりに突いて、愉悦の大きさに不意をつかれる。途端、脊髓が痺れて視界が霞む。下腹部だけが重力を変えられてしまった様な違和感が、途轍もなく快かった。

「『あふん』じゃねーだろ？ 言いなよ、ほら、入れたらなんだって!？」

髪の毛を掴まれたまま揺さぶられて、開き放しの口腔からだらしない呻きが漏れる。淫孔を勃起が満たしている、それだけで充足感が物凄かった。

「い、入れたりしたらあ……、き、きもちいいのお……っ！」

麻痺感覚に回転を失った脳の代わり、肉体が甘く素直に答えて一瞬の静寂。とろりと蕩けた瞳が色彩を急速に失って、口端から涎が垂れていく。そんな対魔捜査官の美貌が塗り替わる瞬間に喉を鳴らした群衆が、硬直したのは自然だった。

「そのまんまじゃん、コイツ!!」

「見てよこのエロ顔！ やっぱコッチがホンモノでしょ!？」

女子生徒たちが高く笑う。それでも今度は、男子生徒たちの間には笑いは起こらなかった。却って目を座らせて、輪が縮む。細腰を掴む坊主頭の手に力が加わった。

「ん、は、……っ！」

ズルリ、勃起が抜けていく。削がれて、潰される肉褻の感覚にプツプツ、脳に気泡が生じる様な。身体が細かに痙攣する。涎がダラダラと零れて学習机に水溜りを作った。それが女子生徒の嘲笑を誘い、笑われてゾクゾクと心が震える。

(悪循環……っ)

疎外された精神が、眩きを捨てる。苛立たしいのに、どうすることもできないのだ。それに苛立ちも長くは続かない。坊主頭がグッと腰を突き出すと、グジュリ肉孔が抉られて、歪んだ粘膜と肉褻が再び強烈な性感を作り出す。腰を引かれると削がれる肉褻が背筋を襲う性感を生み出す。なにより勃起が体内を埋める充足感と、勃起が体内から抜けていく喪失感とのギャップに惑乱させられた。

「でたり、はいったり、キモチいいよお……ッ！」

呂律が怪しかった。そもそも声を発するだけで、口腔にざわめきが広がってしまったのだ。そしてなにか言うたびに浴びせられる嘲笑と侮辱に脳をジリジリと炙られるのも、堪らなく気持ちよかった。

グチュ、ヌル、粘音が響く。酷く単純な動きが、一種の予定調和を生み出して心地よい快楽を作っていく。深く突かれて息を詰め、浅く引かれて息を吐く。自由落下し続ける様な甘い愉悅が醸成されて、ゆつくりと周囲に溢れ返った淫気にさえ馴染み始めた。

「やべ……、オレ、出ちまいそう……！」

「いいよお、……だしていいよお……っ」

（よくない……っ!!）

慌てて否定しても言葉にはならず、体内で虚しく消失していく。ヒュウッ！ とからかいの口笛を誰かが吹いて、脊髄に走る麻痺感覚。見せつけている？ そんな気さえしてしまう。眼前で落ち着かないでいる男子生徒たちが、少し、滑稽に見えた。彼らが欲望を持って余して困惑しているその前で、坊主頭に射精させるのだ。

「綾乃お……！」

「……い、いつでも、いいから……！」

俄かに律動のペースが上がり、動作に粗雑さが加わる。それが却って少女の性感を刺激して、細腰がうねり、男が呻く。引き寄せられ、グジュリ、一際強く貫かれて、動きが不意に静止する。

（ちよっと、また……っ!）

膣出しの記憶が鮮明に蘇って、痛烈な抵抗感。なのに肉体は押さえつけられたまま、細





腰を揺らめかせて射精を促し、陰茎が大きさを増す。最悪の予感にうなされながら、淫腔がキュッと勃起。ペニスを締め上げて、ビクリ、男の身体が弾んだ。

ビ、ビユク、……ビユブ……ッ!!

「ひ、あ、熱う……ッ!!」

最奥を精液に叩かれる異常な感覚に綾乃の身体も弾んで、小さな絶頂が連続する。クラ、と眼前が左右に振れる。陶然とした表情を群衆に晒したままヒク、ピク、肢体を細かに痙攣させると、膣中で小さくなつていく陰茎に合わせる様に、強張らせていた身をゆつたりと脱力させた。

「あ、……なんだか……」

言葉が途中で途絶えたことに、綾乃の精神こそが一息吐く。肉体中に色濃い安息を、声にしなくて済んだからだ。もつとも言葉に表さずとも、すべては観衆に見抜かれているだろう。異様にだらしなく艶美な表情だけでも、集団の前で膣出しされた綾乃がどんな気持ちに浸ったのか、明快過ぎた。それは女子たちには嫉妬以上の呆れをもたらし、男子には点火をもたらした。

「わ、……コイツ、ホントに最悪」

パッと手が放され、机の上に放置された転入生の身体に男子たちが一斉に群がりよる。放心の坊主頭がどかされ、頭や足を掴まれて、ひっくり返され仰向けにされる。

「次は俺だ！」「オレ、もうこっちでいいよ！ 我慢できねえ！」

ここは前後左右から飛びついてきた勃起剥き出しの欲獣たちと、獣臭の檻の中だ。炙られ炙られ、遂に発火した牡獣に取り囲まれて、浴びせられるのは眩しい淫気。それは綾乃自身の淫熱と融合してもう捻じ曲がってしまった肉体の感性を助長していく。男どものギリついた視線が心地よかった。スーツの内側に籠る、ベトベトした熱気が清々しい。そしてなにより最悪なのは、剥き出しの性器の中に粘着する精液の生温かささえ愛しく感じられてしまっていることだった。

(……この、身体……っ)

苛立ちを肉体に向けて、呪詛の様に言い放つ。為し得る抵抗が、僅かそれくらいしかないのだ。三肢が乱雑に引つ張られ始めていた。我勝ちに肢体は取りつかれて、両脚の間には誰かが入り込もうとしている。いきなり机に飛び乗ってきた男に頭をガッチリと掴まれ、無遠慮に勃起を突きつけられた。間隙の殆どない、本当の零距离。鈴口、亀頭の色彩、棹の長さ、そして匂い。すべてを否応なく知らされてしまつて、背ければいいのに、双眸はうっとりで見入ってしまう。いや、それどころか先端に満ちた先走り液を啜りたくて、舌が唇の狭間から伸びていく。

(まさか、自分からなんて……！)

精神の動揺を他所に、まったく逡巡なく舌が鈴口へと向かう。チロリと触れて、瞬間、

頭部全体が甘い痺れに細かく震えた。

「あふ、……ん、おいしい……」

(……っ?)

歪んだ感性が、醜悪な苦味を甘露に変えて、言葉にさえしてしまう。鈴口に溜まった先走りを舐め、くすぐる様に円を描きながら亀頭全体に舌先を這わせていく。徐々に接地面を増やして、今度は巻きつく様に雁を愛撫する。

「うわ、コイツホントにチンポ好きなんだ」

「……うん、おいしいし、きもちいいし、さいこうかもお……」

(ちよ、つと……なんてことを)

それでも舌が勃起に纏わりつくたび脳を侵す電撃に、事実甘い味覚に、綾乃の精神が気圧される。感覚が氾濫していた。足にしがみつかれ、膝やふくらはぎに頬擦りされている。左手が持つていかれ、その指になにか硬くて険悪なモノを押し付けられている。下腹部を撫でられ、腹筋を撫でられ、脇腹をさすられている。すべては微弱だが淫気を触発し、なにより身体中が欲獣どもに好き勝手されているという状況自体が嗜虐を生んで、少女の心を千切るには十分だった。

「よっしゃ、オレが二番手だ！」

眼前に跨った男の向こう、次鋒争いが決着して叫び声上がる。細腰が掴まれ、勃起を

股間に擦りつけられるのと同時、少女の唇が薄く開いて勃起を口腔に迎え入れていく。眩む様な熱気が頭部に溢れて、鼻腔から熱い息を繰り返して捨てる間に合わない。それなのに淫裂をツプリ、熱いモノに割り開かれ始め、ゾクゾクする充実感が湧き上がって、それから。

……グジュプッ!!

「んむっ! うう!!」

淫孔が奥深く貫かれた。有無を言わさない強烈な雷が身体を貫いて、反射的に口腔の勃起を強く吸う。途端、目の前の男が呻いて、亀頭が膨張して、倍する力で頭を押さえつけられる。

ビュクッ! ドプビュ……ッ!!

唐突な射精。口腔の粘膜や舌や歯間に、大量の精液が浴びせられて臭気と味覚に満たされる。息が詰まり、苦しさも快楽に転化していく。それでも口一杯の粘液を舌で掻き混ぜながら嚥下すると喉を侵す不快な熱と粘度が心地よい。だが意識はどこより淫孔性交に引き摺られていた。二本目の勃起が酷く気持ちいいのだ。深くヌルリと挿入されて、感じられるペニスの形と熱と脈動。浅くクチュクチュ小突かれて、淫裂がピリピリと痺れる。

「あ、ちよ、きもちいつ、……ん、……っ!」

「お、光栄だねえ、そう言ってもらえると」

(……でも！)

拒絶の言葉を搾り出す。前後して、揺れ伸ばされた細触手群。

「ひ、……んっ」

(き、た、……っ)

細触手に対魔スーツの上から美乳の先端、浅ましく突出した乳頭をつつかれて、思わず漏れた緩い嬌声。数十の細触手が、全方位から伸びてきて優しく肢体に纏わりついてくる。ヌラヌラと粘液にぬめる先端で四肢をつつき、背中をスルリとなぞって、搔痒感にゾクゾクさせられる。

胸に向けられる細触手が何本といわず増加していく。その数だけでも身体が快楽の予感に震えて、どうしようもなかった。上下左右から群がってくるのだ。下からつつく様を持ち上げられたり、上からつつく様に潰されたり、そうしてヌッと搾られた膨らみの先端をそつとくすぐられて上体が揺らめかされる。

「……く、ん……」

(やだ、また、……っ)

身体中に染み渡っていく性感が、微かな小康を得ていた精神を襲い、惑乱が始まる。麻痺感覚と小さな雷鳴に、心をも肉体と同じく単色に仕立て上げようと波状に被さってこれると、何度も波に浚われて傷ついた防壁が呆気なく崩れていくのだ。そうして尖った劣

情に直面し、茹でられた心がだらしなく弛緩して、肉体同様に蕩けてしまう。

「ん、ん、……んう、もつと……、ちゃんと……っ」

(……こんな、ヨワイの……)

仄かな刺激がもどかしかった。クニユクニユ、ひっきりなしに双乳は形を変えているのに、ソフト過ぎて刺激が遠い。乳頭がつつかれてるのに、浅過ぎて搔痒感ばかりが募っていく。

(なんで……?)

双乳に群がる細触手たちを眼下に見て、少女は直ぐに納得する。いま与えられている刺激はすべて、対魔スーツ越しのものなのだ。きつと促されている。触手が試す感じでしか触れてこないのは、対決の象徴たる戦闘衣を未だ綾乃が脱ぎ捨てていないからだ。

——それなら、解除しようか？

(ダメ)

体内、提案が聞こえて無意識に、しかし言下に拒絶する。異形の体内で戦闘衣を脱ぐということは自分を全否定するものだという最低の矜持を、まだ、少女は忘れないまま保持している。それでもそれが余りにも無力で儂い抵抗だということをも少女は同時に知っていた。『AMS』は精神に連動した戦闘機能だ。だからこの戦闘衣が一般人相手ならばともかく、異形を相手にすればいまや何等の防禦力をも持ち合わせていないも同然なのは、

自明のことだ。

「どうせ、脱がなくても」

短く呟いて、綾乃はゆつくりと両の腕を左右に広げていく。それは無抵抗を表明していて、慎重に窺う感じで戦闘兵器に触れていた細触手群の揺らめきが活性化し始めた。

(……いまの私じゃ、ふせげない)

疲労感とは結局諦観に繋がって、少女は溜息混じりに声なく捨てる。それでも、不思議と心が軽いのだ。触手群を前にして、異形の体壁を背景にして、奇妙な安息が得られている。そうして四肢をくつろげた少女の身体は、乳白色の世界に鮮烈な彩となって、美の中心に占位しようとしていた。対決の放棄は綾乃を果実の中に溶け込ませて、馴染み、違和感を失わせ、調和へと移行する。例え穢されても、少女の美しさは水際立っていた。長い四肢と首から背、細腰、ヒップを連ねる優美な曲線。肥大させられてしまった双乳も、戦闘兵器としてではなく一個の美肢体として見れば、重力感と張力感が紙一重の世界で均衡を保つ、華麗なアクセントだった。綾乃には、少女と女の狭間に揺らめく存在ならではの、常動してゆく可憐さというものが確かに備わっているのだ。

「……さあ」

微かに両手を揺らめかせる。狼藉に許可を与えるのだ。すると数を増した触手群が綾乃に向かい殺到してきて、蠢き始める。くるまれる感じで両の上腕に絡み付かれた。体温よ



りは僅かに温かい。先端は黄濁した粘液にぬめっているが、本体そのものも薄く湿気を帯びていた。よくよく見れば表面には小さな突起が数多ある。そのせいか、絡まれているだけなのに上腕は繊毛にくすぐらわれている様な感覚があつて、スーツ越しに淡い性感が広がった。

(これで、チョコセツさわられたら?)

心がざわめく。太腿が絡め取られ、膝が包まれ、下肢が戦慄く。側線や背中に何本かの触手が貼りついて、それだけでも鳥肌の立つ様な快楽電流が走り抜ける。

(でも)

まだ、足りない。刺激が遠い。かつての抵抗を試みようとする焦燥感ではなく、快楽に呑まれたがつての焦燥感が体内に横溢している。そして、綾乃は不意に眼前の光景に息を呑んだ。

(……あ)

二桁は下らない触手たちが、双乳へゆつくりと向かってくるのだ。それら一本一本が下弦を形作り、膨らみを左右それぞれに下からそつと持ち上げた。

「……っん、」

持ち上げた膨らみを、楕円になりながら上からも左右からも挟み込み、緩やかに優しく搾り出し始める。常に円動している触手たちのぬめる繊毛が、乳肌こそばゆい。幾重に

も絡まれながら、少しずつ根元からくぶり出されていく双乳の先端で、乳頭が乳輪ごと発情してムクムクと持ち上がり勃起して、漆黒のスーツを突き破りそうなくらいに突出する。ざわざわと双乳の裾からのぼっていく快楽電流が乳頭に集中して、少女の期待感を高めていく。目の前、伸びてくる触手が二本あるのだ。

「……あ、はやく、さきつぽお……」

優しい円動に揺れが加わり始めて、少女の期待感が増大し続ける。膨らみが上下左右に引つ張られ、恣意的に加えられる力が重たい性感となつて身体に響く。円筒形に搾られ、瓢箪型に搾られ、ニユルニユルと変化する圧力そのものが快楽だった。或いは浮き上がった乳輪ギリギリまで、乳房全部を触手に覆われて、繊毛にくすぐられまくると、我慢など利く筈がなかった。

「なにしてるの？ はやく、はやく、はやく！ さきつぽ、いじつてよお!!」

上腕を絡め取られ、T字姿勢を取らされた身体を振つて訴える。すると何本かの触手が応じてくれて、ぷつくりと浮き出た勃起乳頭がさわさわと撫でさすられた。

「んう！ あ、そ、それえ、キモチいい！ いいんだけどお……ッ！」

(……とおいの……ッ!!)

乳頭へ向かつて搾り集められた愉悅が、スーツ越しの刺激にチリチリと発火する。だがそれは余りにも物足りない微々たるもので、少女は益々身を振らなければならなかった。

「どうしよお、どうしたら……？」

(もつとちゃんと、キモチよくなれる……の?)

【解除が嫌ならば、裂いてあげようか?】

「え？」

低く響く声に嘲笑が混じって、それに気付くことができなまま耳を傾ける。そう、脱げないのならば裂かれてしまえばいいのだ。提案が酷く名案に思えて、慌てて少女は頷いていた。

【それなら話は早いさ】

響くとともに目の前、新たに一本の触手が現れる。それは何本もの細触手をひねり合わせた感じのしつかりしたもので、いきなり鞭の様にしなると対魔捜査官の外皮に襲いかかった。

「……あう！ くふ！」

乾いた打撃音が一つ、二つ。衝撃が骨を軋ませて、矜持を失いかけた対魔捜査官の口から耐え様もなく呻きが漏れる。それでも目は眼下に驚くべき現実を突きつけられていた。

(あ、うそ、そんな簡単に……ッ)

鞭打たれた漆黒のスーツは、打撃のままに破れ素肌を晒してしまっていた。手始めに打たれた右肩部分は抉られた様に黒が失われ、腕の付け根のすべてを露出させてしまっていた。

る。続けて打たれた腿も、肉肌を唐突に露わにさせられた。そしてもう一度鞭がしなる。目の前で弧を描いて狙われたのは。

「ひ、ハッ……あ!!」

左の膨らみを擦る様に打たれて、だらしない声が漏れ溢れる。目の前に火花が散つて思わず対魔捜査官は両目を瞑った。痛烈な搔痒感が胸に広がる。ジン、と痺れて甘く痒いあの感覚。それからゆっくり、両の目を開いていく。ドキドキする期待感に蝕まれて、祈る様に下方を窺えば、見えたのは漆黒のスーツの裂け目からたつぷりと零れ出た肉乳と、紅く勃起した乳頭。

「あ、でちやつてるう……っ」

自然、顔が綻び、頬が緩んでしまうのだ。やっと漆黒の防禦膜から例え片方だけだとしても露出させることのできた生乳頭。ここを、弄られたら？ ウネ、ウネ、細触手が眼前に蠢いている。こうなると、肢体に纏わりつく細触手すべてが一層の搔痒感を掻き立てるのだ。背中を撫でられ、側線をなぞられ、なにもかも期待と違つて苛立ちが募る。

「ひあ、んっ！ そこじゃ、ない、それもいいけど、いまはちがうのお！」

増え続ける細触手が少女の膝裏をつつき、露出した太腿を撫で、妖しい快樂にふくらはぎを反り返らせながら抗議する。

「キャウッ！ ワキ、や、それ、ダメエ！」

そつと伸ばされた二本の細触手に剥き出しになった右の腋をツンとつつかれて、思わず身体を捻って声を上げる。なのに制止には耳を貸してくれなくて、窪みの淵をなぞられ、穴奥を穿られると、途端に脂めいた粘汗がジワと噴き出て、細触手がツプリ、腋汁に浸かってしまう。

「うなじもお！ いまはダメエ！ はやく！ おねがいい!!」

ポニーテールを持ち上げられ、うなじをくすぐられ、くすぐったさが気持ちよくて、だがいまは違うのだ。だから心のままに絶叫して、含み笑った声が聞こえる。

【どうせどこでも感じるんだ。どこを弄ろうとも同じことだろう?】

対魔捜査官への許し難い侮辱をぶつけられて、なのに綾乃はそうとさえ気付くことができなかつた。それよりも後段が気にかかる。どこでもよい訳がなかつた。せつかく露出したのに。空気に触れているのに。一杯に張り詰めて弾けてしまいそうな勃起乳頭が、捨て置かれている。

「わかっているくせにいい！ チクビ、チクビいじってよお！ ダメなの、いたいのお!!」

あらゆる刺激がソフトなせいで、乳頭の破裂感が際立ってしまったているのだ。本当に痛かつた。先端がこの快樂世界から爪弾きにされたままでは耐えられない。

【忠実な戦闘兵器と聞いていたのに、キミも案外わがままだ】  
やれやれという口調で、ゆっくり声が響いてくる。それを、のんびり聞いている余裕な

どなかった。

「だって、どうしても、いじってほしいの！ つらいの！ いやなの！」

【わがままで】

「ゴメンなさい!! ワガママなんです! ゴメンなさい! だから、だからあ!!」

発音することと舌が痺れて、狂態が加速していく。縋るしかなかった。語調さえ変えて、対手が昔日の異形だということすら忘れて、愚かに無残に泣きつくのだ。

「お願いします! お願いします! おね、えひッ! おおッ!!」

少女の肢体がキュンと硬直する。鋭く、撫で斬りに、一本の細触手が左の乳首をはいたのだ。しなつたそれは直ぐに逆のしなりを加えて上から乳首をはたき、返す刀で下から乳輪ごと鋭利に打つ。

「おひッ! スゴ、ひはッ! これ、えあう!!」

軽快な音が連続する。眼前、赤光が明滅して視界がグルリと上にズレる。打たれて、ビクンッ! ビクンッ! 痙攣して、細腰がカクカクと前後に振れる。そして、双乳がそれまできなく青筋が浮き出るくらいに強く搾り出されて、ジンジンに痺れ上がった乳首が横殴りに容赦なくピシリ! 打ち抜かれた。

「あひヤッああ!! イクう、イク!! チクビたたかれて! イクう……ッ!!」

全身がピンと突つ張る。打ち震え、ピュクピュク淫液を肉孔から噴き出させてしまつて、

味わわされたのは乳頭打擲絶頂。ジン、と痺れた双乳が溶け消えた様な感じがして、脳が浮遊する。寸瞬身体が硬直して、緩やかに解けていく。

「……あふ、……ふ、……たたかかれて、イッ、たの……？」

グタリ、綾乃の身体が脱力した。叩かれた乳頭がまだ甘く痺れている。今度は優しく搾られている双乳が、一層過敏になって繊毛愛撫に戦慄している。口端から涎を垂らして絶頂に浸りながら、少女の肢体は貪欲にざわめいていた。細腰をくねらせて、無意識のうちにおねだりを始めてしまっていた。

「……チクビだけで、イッちゃった……」

幸せそうに呟いて、それすらもおねだりなのだ。声で甘えて、視線もまた、甘えていた。潤んだ瞳で突起触手を見詰めては、ふしだらに誘惑している。

【クク、調子が出てきたじゃないか】

低い声に呼応して、突起触手がまた数を増し、ユラリ、ユラリ、矛先を対魔捜査官のありとあらゆる部位に向ける。黄濁液を溜めた先端が照準をあてている。なにをしようとしているのか分かってしまうのだ。濃密な淫気が鋭く少女の肢体を射抜いている。

「……あ、……もしか、して……」

ピクン、ピクン、突起の先端が脈動し始める。射精の準備動作に似た動き。揺らめきながら三百六十度から綾乃の間近に近付いて、ゾクリ、鳥肌が立つ。少女が全身を狙われて

いる。漆黒の部位も素肌の部位も隔てなく、髪も、爪先も、指先も。

(こんな……っ)

眼前、数えられるだけでも数十はある。だが実際はそんなものではない。目の前の突起触手とて折り重なり、更には上にも下にも、後ろにもいるのだ。一体何百あるのだろうか？ それら数多の触手すべてが有する鈴口が、異形エキスを射出しようとしているのだ。

(……かけられたら……)

感触。味。臭い。想像してしまつて、子宮が鼓動した様な。動悸が激しい。淫孔が解れたり締まつたりを繰り返して、歪み続ける肉襞がヌチュヌチュ快楽を生み出しながら淫汗を垂れ流し始めた。

【想像だけでイキそうなんじゃないか？ 綾乃？】

「……んん、……そんな、あ……っ」

凶星だつた。細腰がピクピクと震えて、小さく、軽い絶頂が連続していた。期待感だけで、想像するだけで、身体が激しく反応してしまう。幾つかの鈴口が待ち切れないとばかりに先走つて粘液をピュクリと噴出させて、その描かれた放物線だけでも綾乃の肢体はゾクゾクとする絶頂に達してしまう。

【秒読みして差し上げようか？ 零になったら塗れさせてあげるよ】

「……え」



(まみれるの? ほんとうに……?)

ゾク、ゾク、脊髓が痺れる。強烈な期待感。そして声が響く。

【5】

(はじまった?)

【4】

(ホントウにはじまってるう! あと『4』? そうしたら?)

【3】

(このトッキが、ゼンプ!)

【2】

(私に、クサイのを! キタナイのを!)

【1】

(もうすぐ、クルの!? クサイの、クルの!?)

【ゼロ】

(……ッ!!)

ビュビュビュクッ!! ビュクビュクッ! ドビュクビュッ!!

「んあああッ!! あぷッう! んぶ、ぶ、ぐぷッ、……う! ううあああッ!!」

絶頂。粘液打擲と臭気に、ガクガクと身を揺すりながら綾乃は絶頂させられていた。赤



い光が瞬いて、意識が飛びかけてはビュクビュク打ち続く連続射精に押し上げられ、逃れられない絶頂感に揺り起こされる。立て続けにイカされて、痙攣と麻痺感覚だけが脳を占めるのだ。それから徐々に醜悪だが甘くて安らげる匂いが脳を満たし、最後に打擲の痛痒感が身体中に纏わりつき始めた頃、漸く淫液打擲が途絶えた。

「……ひゅッ、……う、……すごい、……すごい……」

四肢も、顔どころか髪の毛の末端までも、なにもかもを黄濁させられて、獣臭の中、吹き続ける。最早肢体という肢体は異形のエキスに覆われ、戦闘衣さえ漆黒を失った。指でつつけば第一関節までが埋まってしまいそうな執拗なコーティングの中に対魔捜査官は埋められて、ヒクリ、ヒクリ、断続的に弾む。

(……もう……)

心のどこかで眩きが起こる。鮮烈な昇天感覚に一息を吐いた少女の片隅、辛うじて残存していた対魔捜査官の矜持が寂しそうに言葉紡ぐ。

(ぜったい、……まちがっている……のに)

それは、皮肉にも絶頂が呼び覚ました理性の欠片だった。養分供給体に成り下がってよい訳がなかった。だが、そんな考えも俄かに消えていく。快樂の海の中で、思考など長続きする筈がなかった。あくびをしたくなる様な安息の愉悅が、ここには溢れていた。

【少し満足させてやると、直ぐに下らない考えを始める。困ったものだね？】

この続きは製品版をご購入の上、  
お楽しみください。

編集・発行

**株式会社キルタイムコミュニケーション**

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

**<http://ktcom.jp/>**

# キルタイムコミュニケーション小説シリーズ あなたはどのタイプ？



ドキドキラブな  
ハーレム系ライトノベル！

二次元  
ドリーム文庫

サイズ:文庫

戦うヒロインが屈服されちゃう！  
かなり過激なライトノベル！

二次元  
ドリームノベルズ

サイズ:新書

※「二次元ドリームノベルズ」は18歳未満の方は購入できません

日常に密着したエロス、リアルな  
舞台設定で送る官能小説レーベル！

リアルドリーム文庫

サイズ:文庫

フリーダム度120%!?  
ジャンルにとらわれないドキドキ★ラノベ！

あとみっく文庫

サイズ:文庫

詳しくはKTCの公式サイトにて！

キルタイム

検索

Click

電子書籍版も各ダウンロードサイトにて続々配信中!!



あなたのキモチイをお手伝い!

# キルタイムのアダルトコミック誌!

業界唯一! エロラノベ&エロコミック満載!!

二次元ドリームマガジン

10年間ありがとう! オレたちの魂はこれから!!

ED (DREAM MAGAZINE)

666キアラ

守聖女 プリズムセイバー

偶数月 17日発売

vol.60 2011.10

二次元ドリームマガジン

魔法、催眠、性転換...不思議Hコミック誌!

魔法、催眠、性転換...不思議Hコミック誌!

魔法

10月6日90円

大迫力カウボーイナンパ

吉田大凡

奇数月 12日発売

コミックアンリアル

フェエをテーマにツキ抜ける作品群!!

comic プリズム

Volume 3 420 18

フェエ

孝明

濃

2・6・10月 下旬発売

コミックプリズム

KTCといえば闘うヒロインアンソロ!

メガミクライシス

MEGRIS Vol.1

強く美しいヒロイン アンソロ

浮く美しさと 強さ

奇数月 中旬発売

メガミクライシス

詳しくはKTCの公式サイトにて!

キルタイム

検索



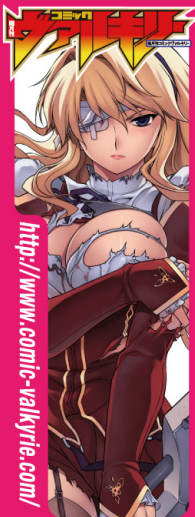
電子書籍版も各ダウンロードサイトにて続々配信中!! ※いずれも18歳未満の方は購入できません。



# キルタイムコミュニケーション オフィシャルサイト

<http://ktcom.jp/>

- ◎雑誌、コミック、小説の通信販売もやってるよ!
- ◎二次元ドリームマガジン・コミックアンリアルのパックナンバーも買えるよ!
- ◎ジャンル別で作品も選べて超便利!
- ◎二次元編集部のおいしいBlogも更新中!



<http://www.comic- Valkyrie.com/>



<http://www.cran-berry.com/>



<http://www.mille-feuille.jp/>



<http://www.2d-dream.jp/>

KTCの戦うヒロインオンリー漫画雑誌! 18禁ではないからこそ表現できるドキドキがある!!

二次元ドリームノベルズがアニメにも進出! 新生ブランド・クランベリーをよろしく!!

二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム! 「ミルフィーユ」ブランドにて続々登場!

二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める! 携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ!